

当科におけるOHP療法約10年間の統計的観察

鈴木卓二* 樋口道雄*

古山信明* 大塚博明*

千葉大学中央手術部において、昭和49年1月より昭和58年5月までの約10年間に、OHP療法を施行した症例につき、その年次別変動および主要疾患の治療成績などを報告する。

当施設の高圧酸素治療装置は、Vickers社製のone man chamberで、純酸素下にて、ほとんどの症例に対し、10ポンド(約1.8ATA)から14ポンド(約2ATA)まで加圧した。治療時間は、症例により多少異なるが、加圧、減圧時間も含めて、70～90分であった。

治療を受けた症例数は合計566例で延治療回数は、7,861回におよび、1症例あたりの平均治療回数は13.9回であった。

症例を疾患別にみると、突発性難聴が197例と最も多く、全体の35%を占め、次いで腸閉塞の179例(約32%)、末梢血管循環障害52例(約9%)、脊椎、脊髓系疾患の43例(約8%)の順になっている。その他、ガス中毒6例、網膜動脈閉塞症3例などであった(表1)。

性別で見ると、男性320例、女性246例で、男女の比は5:4であった。

年齢では、生後7日目の乳児から85歳にわたり、平均36.6歳で、30歳～50歳までが全体の54.3%を占めていた(表2)。

年次別症例数と治療回数をみてみると、昭和48年にはわずかに4症例に99回治療したにすぎなかったが、翌昭和49年には約10倍の49症例に642回治療を行った。以後年とともに次第に増加し、昭和57年には93症例に1,080回の治療を行っている。な

お昭和54年度に症例数、治療回数ともに著しく減少しているのは病院移転のためである(図1)。

つぎに、主要疾患の症例数と治療回数をみると、突発性難聴では197例に3,430回の治療を行い、1症例あたりの平均治療回数17.4回である。腸閉塞では179例、927回、1症例あたり平均5.1回、末梢血管循環障害は52例、975回、平均18.7回、脊椎、脊髓系疾患は43例、818回、平均19.5回、悪性腫瘍は17例、208回、平均12.2回であった。

表1 O.H.P 治療患者の疾患別症例数
(S.49.1～S.58.5)

| 疾患名 | 症例数 | 中止回数 | 延治療回数 | 平均治療回数 |
|----------|------------|------|-------|--------|
| 突発性難聴 | 197(34.7%) | 14 | 3430 | 17.4 |
| 腸閉塞 | 179(31.9%) | 10 | 927 | 5.1 |
| 末梢血管循環障害 | 52(9.1%) | 10 | 975 | 18.7 |
| 脊椎脊髓系疾患 | 43(7.9%) | 7 | 818 | 19.5 |
| 悪性腫瘍 | 17(3.0%) | 2 | 208 | 12.2 |
| 難治性潰瘍 | 13(2.3%) | 3 | 387 | 29.8 |
| 顔面神経麻痺 | 11(1.9%) | | 258 | 23.4 |
| 内分泌系疾患 | 11(1.9%) | | 288 | 25.4 |
| メニエル症候群 | 7(1.2%) | | 135 | 19.3 |
| 耳鳴り | 6(1.1%) | | 89 | 14.8 |
| 急性ガス中毒 | 6(1.1%) | | 62 | 10.3 |
| 瘻孔 | 6(1.1%) | | 81 | 13.5 |
| 皮膚移植 | 5(0.9%) | | 61 | 12.2 |
| 脳血管障害 | 4(0.7%) | | 44 | 11.0 |
| 慢性骨髄炎 | 3(0.5%) | 1 | 27 | 9.0 |
| 網膜動脈閉塞症 | 3(0.5%) | | 40 | 13.3 |
| 薬物性肝炎 | 1(0.2%) | | 12 | 12.0 |
| 空気塞栓 | 1(0.2%) | | 1 | 1.0 |
| 腎出血 | 1(0.2%) | 1 | 1 | 1.0 |
| 計 | 566(100%) | 48 | 7861 | 13.9 |

*千葉大学医学部附属病院手術部

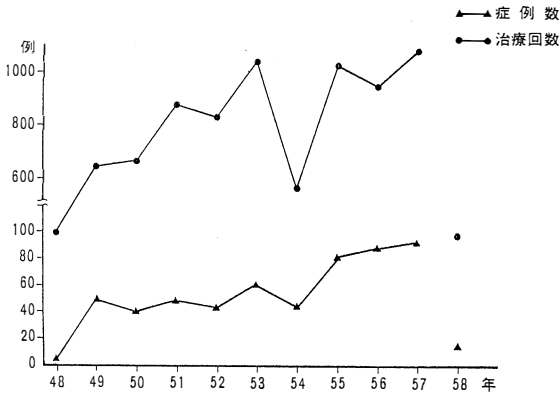


図1 年次別症例数と治療回数

表2 OHP 治療患者性および年齢別

| 年齢 | 男 | 女 | 計 |
|---------|-----|-----|------------|
| 1ヵ月未満 | 2 | 1 | 3(0.5%) |
| 1歳未満 | 22 | 11 | 33(5.8%) |
| 1 ~ 9 | 29 | 33 | 62(10.9%) |
| 10 ~ 19 | 11 | 25 | 36(6.5%) |
| 20 ~ 29 | 26 | 24 | 50(8.8%) |
| 30 ~ 39 | 61 | 44 | 105(18.6%) |
| 40 ~ 49 | 55 | 49 | 104(18.4%) |
| 50 ~ 59 | 62 | 36 | 98(17.3%) |
| 60 ~ 69 | 32 | 17 | 49(8.6%) |
| 70 ~ 79 | 16 | 6 | 22(3.9%) |
| 80歳以上 | 4 | | 4(0.7%) |
| | 320 | 246 | 566(100%) |

主要疾患の年次別症例数の変化をみると、突発性難聴は昭和53年度には36例で全体の約60%を占めていたが、昭和54年度には一時著しく減少し、以後次第に増加して昭和57年には27例で全体の約30%を占めるようになった。これに対し腸閉塞は、昭和53年度には12例、約20%であったが、昭和55年度より著しくその数を増し、昭和57年度には47例で全症例の約半数を占めるに至った。

末梢血管循環障害、脊椎、脊髄系疾患、悪性腫瘍などは、年次的に数の変動はあまりなく10年間の平均ではそれぞれ年間5例、4例、2例の割合であった(図2)。

昭和53年度以前を前5年、昭和54年度以後を後5年とし、主要疾患の前5年と後5年の症例数を比較すると、腸閉塞が16例から163例と著しく増加

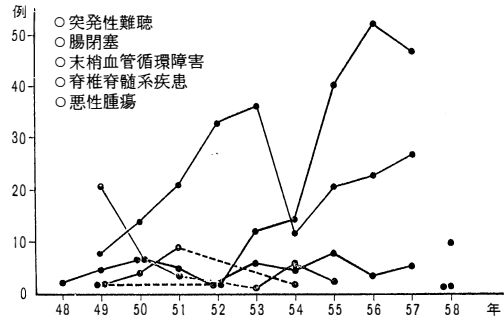


図2 主要疾患の年次別症例数の変動

表3 主要疾患の OHP 治療成績

| 疾患名 | 全症例数 | 中止例数 | 実症例数 | 有効数 | 無効数 |
|----------|------|------|------|------------|-----------|
| 突発性難聴 | 197 | 14 | 183 | 128(69.9%) | 55(30.1%) |
| 腸閉塞 | 179 | 10 | 169 | 134(79.3%) | 35(21.7%) |
| 末梢血管循環障害 | 52 | 10 | 42 | 30(71.4%) | 12(28.6%) |
| 脊椎脊髄系疾患 | 43 | 7 | 36 | 23(63.9%) | 13(36.1%) |

表4 イレウスに対する OHP 治療成績

| | | | |
|----------|--------------|----------------|------------------------------|
| イレウス179例 | 大人81例(45.3%) | 非手術 63例(77.8%) | 癒着14例(77.8%) 絞扼4例(22.2%) |
| | | 手術 18例(22.2%) | |
| | 小児98例(54.7%) | 非手術 81例(82.6%) | 癒着9例(52.9%) 絞扼8例(47.1%) |
| | | 手術 17例(17.4%) | |
| 計 | | 非手術144例(80.4%) | 癒着23例(65.7%) 絞扼12例(34.3%) |
| | | 手術 35例(19.6%) | |

しているのに対し、突発性難聴は112例から85例とやや減少し、その他の疾患は25例前後でほぼ平行という傾向がみられた。

つぎに、主要疾患の治療成績をみてみると、有効であったものが、突発性難聴では実症例183例中128例で約70%、腸閉塞は169例中134例約80%、末梢血管循環障害が42例中30例、約70%、脊椎、脊髄系疾患は36例中23例64%で、各疾患とも良い成績であった(表3)。

なお治療を中止した症例数とその原因をしらべてみると、突発性難聴は14例約7%中止し、その原因は心理不安が5例で最も多く、耳痛4例、合併症3例であった。腸閉塞は10例中止し、その原因は合併症が7例であった。

最後にイレウスに対するOHP療法を検討した。まず症例を大人と小児に分けてみると、179例中大人81例(約45%)、小児98例(約55%)となる。

大人の場合、非手術例すなわちOHP療法で治療した症例は63例で約78%、手術を施行したものは18例、約22%であった。手術所見は高度癒着14

例、約78%、絞扼4例、約22%であった。

小児の場合は、非手術例8例、約83%、手術例17例、約17%で、手術所見としては高度癒着9例、約53%、絞扼8例、約47%であった。

全体としてみれば、非手術例が144例で約80%、手術例35例、約20%で、手術所見では高度癒着23例、約66%、絞扼12例、約34%であった(表4)。

以上、当手術部の最近10年間のOHP療法の統計的観察を行ったが、ほぼ満足すべき成績をあげているものと考えられる。今後益々成績を向上させるべく努力したいと考えている。